

# 「オープンな審議会には真摯に対応する」が、 「市民には真摯に対応しない!？」

## 関電からの「クリスマスプレゼント」はなし

私たち若狭ネットは、12月7日付で「美浜原発の耐震安全性評価結果について」の公開質問状を関西電力に提出し、回答を求めています。11月末に原子力安全・保安院の審議会で新指針に基づく基準地震動の設定に関する議論がほぼ終わりかけたからです。関西電力としての責任ある見解が今なら説明できるだろうと期待したからです。「12月25日に回答をお願いしたい」と申し入れると、関電広報部は意外と受けてくれました。質問状提出から2週間後ですので、その気があれば真摯な回答もあり得ますが、年末の交渉「快諾」は形だけの回答に終わる可能性も危惧されました。私たちは複雑な思いで「それでも少しは考えてくだろう」と半ば期待しながら、関電本社への回答を聞きに行きました。

しかし、「クリスマスプレゼント」は全くありませんでした。これまでの耐震安全性評価で震源断層の長さや地震動を過小評価してきたことについて、誤りを認めるどころか、「耐震設計審査指針が変わったから」とか、「審議会でコメントがついたから」とかで言い逃れしようとしました。結局、「オープンな審議会には真摯に対応する」が、「市民には真摯に対応しない」という回答だったのです。

## 審議会で指摘されれば真摯に対応する

たとえば、耐専スペクトルでは地震規模を断層の長さから松田式で求めています。関西電力は、断層面積から断層モデルで得られるより小さな地震規模を用いていました。「これは過小評価だ」と私たちは2年前から批判してきましたが、関西電力は頑として受け入れとうともしませんでした。また、文部科学大臣を長とする地震調査研究推進本部が行っているように、松田の起震断層の基準を適用して5km以内に近接した断層群を一体で活動する断層帯として

評価すべきだと私たちは主張してきましたが、関西電力はこれも10年以上にわたり一貫して拒否してきたのです。ところが、同じ内容の意見が、原子力安全・保安院や原子力安全委員会の審議会でコメントとして出されました。すると、関西電力は手のひらを返したようにすんなりと受け入れ、耐専スペクトルの評価には松田式を適用し、隣接する断層群を松田の基準で一連の断層帯として評価したのです。

これまで私たちが主張してきたことと全く同じことを審議会でコメントとして出されると「真摯に対応する」のです。活断層や地震規模の過小評価を改めたのですから、私たちはそれ自体は評価しました。その上で、同じ過ちを繰り返さないためには、なぜそうなったのか、その根本原因を明らかにし、反省すべきだと迫りました。しかし、「審議会でコメントがついた」とか、「説明がなかなか受け入れられなかった」と言うだけで、全く反省の色はありません。

挙げ句の果てには、「我々が保安院へ行って断層モデルの問題点などを指摘して、保安院がそれを受け入れて、審議会で取り上げないと変わらないのか」と追及されるや「言われて国の審査のポリシーが変わるようだ、逆に困る」と居直る始末でした。

「市民の意見に真摯な対応をとってこなかったことが過小評価の根本原因だ」---市民グループからこう指摘されたら原子力事業本部や役員へきちんと報告するように求めて、次の質問項目へ移りました。

## 詳細な地質調査をやっているから問題ない

最初の回答がこの体たらくでしたので、2項目以降の回答は推して知るべしでした。すべてについて「真摯な回答」という意味で合格点を出せるような回答はありませんでした。

たとえば、地下で末広がり傾斜している「く」の字型のC断層について、その地震規模を松田式で求める際に断層長さをどのように設定するのかを質

問した項目では、「考慮すべき地震規模の算出は詳細な地質調査の結果を元に考慮しており、現在の評価に問題があるとは考えていない」と全く見当外れでした。「詳細な調査」をしてわかるのは、断層の上端、中央、下端で長さが違うことです。松田式にどの部分の長さを適用するのかわかりませんが地震規模が違います。「だから、なぜ、上端を使ったのかを聞いているんだ」と問いただすと、長い沈黙に入るだけでした。

#### 自分の引用した論文と異なる断層長さの評価

また、関西電力は活断層が地表で短くても、地下では20km以上の断層が広がっているというStirlingら(2002)の論文を引用して、孤立した短い断層では震源断層の長さを20kmとしています。C断層では上端長さの18kmで地震規模を求めています。そこで、なぜ、20kmとしないのかを質問していたのですが、関西電力の回答は、「断層の位置や傾斜の傾向等を勘案し、十分保守的に評価しており、考慮する地震規模は問題ないと考えている。」という珍妙なものでした。C断層自身も地下では20km以上に広がっており、Stirlingらの見解に沿っています。なぜ、20km以上に評価しないのかと聞いているのに、「松田式では18kmを用いている」というだけで、なぜ自ら引用した論文と異なることをやっているのかについての説明が全くありません。質問を読み違えているのではないかと聞くと、「聞かれていることは分かっていて、今ご説明したような答になる」というのです。

#### 同じ断層なのに、評価法でなぜ長さが違う？

白木 - 丹生断層の評価についても同様でした。この断層について、関西電力は耐専スペクトルで松田式に代入する断層長さを16.2kmとしながら、断層モデルではStirlingらの見解を使って長さ20kmとしているのです。同じ断層でありながら、地震動評価の手法によって断層の長さが異なるというのはどう考えてもおかしい。これが私たちの質問でした。これに対する回答は、「耐専スペクトルによる場合には、想定する地震規模が重要であることから、その際必要となる断層長さの想定に断層長さが幅を下回らないようにしている。一方、断層モデルを用いた地震動評

価においては、想定する震源断層面が重要であると考え、最低の地震規模を確保するように保守的な値として20kmとしたものである。」関西電力は、「想定する地震規模が重要だから」とか、「想定する震源断層面が重要だから」としか回答していません。これがどうして「耐専スペクトルでは16.2km、断層モデルでは20kmと異なる長さを用いている」理由になるのでしょうか。

この点では、広報が思わず口走ったことが印象的でした。「1年前に断層モデルで一旦20kmでやったので、それはやり直してなくて、耐専スペクトルを求めるときは断層幅に合わせて16.2kmでやった」と言うのです。つまり、2009年3月末の追補版で2008年3月末の中間報告を訂正する際に断層モデルも耐専スペクトルの断層面に合わせることもできたが、そうしなかったと言うのです。なぜ、耐専スペクトルを断層モデルの20kmに合わせるという、逆の発想をしなかったのでしょうか。「最低の地震規模を確保するように」考えたからなのでしょうね。

#### 回答を読み上げた後は長い沈黙・・・

私たちは、このような回答が読み上げられるたびに、我慢して聞きましたが、耐え切れずに「それは回答になっていない」と追加質問するや、広報は何も答えず(答えられないと言った方がいいかもしれませんが)、長い沈黙に入りました。「断層モデルによって地震規模の評価が4倍も違うのは、用いたデータが違うからだ」という私たちの丁寧すぎるほどの説明にも、「余りよくわかっていません」と答えざるを得ないほど予備知識がなく(広報ですので、これはこれで「正直」でいいんですが)、全く話になりませんでした。やはり、責任ある十分な知識を持った技術者が対応すべきです。「回答を準備したんですけど、いろいろご意見を頂いたので、今のご意見をまとめてうちの中の者にちょっと、どう思うか聞きます。それで、もういっぺん回答すべきだというものであれば、また作りますけど。いやこれが最後だということになるか、わかりませんけど。ちょっと相談しますけど。」というのが関の山でした。これで美浜原発の耐震性は保証されたとと言えるのでしょうか。